



天皇杯に輝く銘茶

そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

10. 上彼杵原頭^{げんとう}に立つ (2)

町道大野原高原線を北に向かって登ると 20 数戸の中尾集落があり、さらに登り続けると、右手に堤がある。

ここで左手に町道坂本中尾線が分岐している。数 10 メートルで、長崎県農林技術開発センター茶業研究室がある。さらに坂本中尾線を西に進むと、中山支線の分岐点に近づく。その正面に「銘茶そのぎ茶」の大きな掲示板が眼につく。ここは、このたび、業務に精励^{せいれい}し衆民の模範である者に授与される、「黄綬褒章」を受章された、大山次作さんのお宅と製茶工場がある。小橋を渡って自営の茶園が広がっている。



長崎県農林技術開発センター茶業研究室

大山さんは、地域の人々をすすめて優良品種「ヤブキタ」の導入をすすめ、地域に先がけて、被覆資材の利用による高品質茶の生産に成功し、さらに、従来の蒸し製茶法を改良し一段と製品の品質向上と製茶法の効率化をすすめるなど、地域のモデル的な経営体として「そのぎ茶」の発展に大きく寄与された。さらに県下を代表する茶産地の茶業部会長として、旺盛^{おうせい}な「リーダーシップ」により、県下統一ブランド「長崎玉緑茶」の創製などに貢献され、さらに県指導農業士・県央農協理事の要職を務められ、担い手育成や茶流通に積極的に取組まれた功績は実に偉大である。このような功績を称え「黄綬褒章」の受章となられたのである。

さきの「天皇杯」受章に引続き「黄綬褒章」の受章は銘茶「そのぎ茶」の名声を一段と昂^{たか}めることになるのである。

筆者は、萩野の茶園で「遅霜対策と覆^{かぶ}せ茶・そして覆せた茶葉の製法は一段と工夫が必要」と熱心に話された大山次作さんの父、覚衛さんのお姿がよみがえってくる。併せて寺井正守議長が、防霜ファン、覆せ茶の設置にあたり、静岡県下（磐田市一帯）を調

査しその対策を町長に具申して町の助成を推進された御尽力も大きかったことを付記したい。

新品種「ヤブキタ」は戦時中から静岡県はいばら榛原郡金谷町にある農林省茶業試験場で選抜され、昭和 28 年に農林省の新品種に認定された茶生産者待望の新品種である。

しかし「ヤブキタ」の普及による原種の拡大を望まない向きもあり、待望されながらも普及はすすまなかった。わが町でも新品種「ヤブキタ」の導入はなかなかその糸口さえもつかめない状況が続いていたが、昭和 46 年初夏、一番茶が終わった 7 月初め寺井議員は、秘かに中山周雄議員と筆者に静岡茶業試験場から茶のサシ苗を頒布してもらおうとの話があり筆者も同行した。早岐廻りの夜行列車で大阪駅に着き東海道本線に乗換え掛川駅から車で走り、目ざす茶業試験場に到着した。

すでに来訪の依頼をうけていた試験場職員の案内で採取茶園を見て回りサシ苗の作り方について詳しく説明を受けた。特に夏期の灌水と冬期の被覆を重点に説明を受けた。

サシ木は 6 月中旬以前に本茶園から切り取り発根剤に 3 時間程度切口を浸し、柔らかく耕耘した串形の圃場に手で押し込んで植込む。串形の圃場毎に黒の寒冷紗かんれいしやをサシ苗より 10 センチ位のすき間を開けて被覆し必ず夕方十分に水をかける。約 1 ヶ月で発根し新芽が出かけるまで、綿密な管理が必要との指導を受け、更に苗上げあまでの管理についても詳しく説明を受けたのであった。

「ヤブキタ」苗の頒布は 1 人当り 20 本を厳守し苗価は 1 本当り 100 円であった。

茶苗を 1 人当り 50 本なりとお願いしたが 1 人当り 10 本と定めているので、長崎の遠来の方々であるから場長の特別の配慮で 1 人当り 20 本を頒布したので御諒解いただきたいとのことであった。

帰町後早速松尾町長に報告しサシ苗育苗管理については、山行苗やまゆきなえ（杉桧等）の生産者の協力を受けて育成したので育成良好に繁殖することができた。町は更に八女茶業指導所から、原種サシ木を導入するなど「ヤブキタ」の原種圃場の拡大を図り、昭和 50 年度から「ヤブキタ」苗を町内茶生産者に頒布することができるようになった。

「ヤブキタ」の導入と同時に茶摘み作業の機械化をすすめるため、茶園の区画整備に取組み推進した。

新品種「ヤブキタ」は、遅霜に弱いとのことは静岡茶業試験場でもお話があったが、長崎県は温暖地だからその心配はなかろうとのことも話された。しかし本県でも遅霜の被害は意外に大きく、この対策が急務となった。寺井議長は、議員数名と静岡県磐田高原等を視察し、防霜ファンの導入を図り昭和 61 年から設置を進め現在では防霜ファンの回転しない茶園は見当たらないようになった。

以下次号

資料 東彼杵町誌『水と緑と道』

【平成 24 年 9 月 14 日発行】